

# SEMINAR HOUSE NEWS

## セミナー・ハウス

### No.140

1996.1.25

＝巻頭言＝

EC から EU へーヨーロッパ統合の構図ー●仲井 斌／2

■第14回大学院共同セミナー

ヨーロッパのアイデンティティ

ー統合の現在、その光と影／4

ヨーロッパ統合の意味を根底から●宮島 喬／4

■特集＝開館30周年記念の集い

開館30周年を迎えるにあたって●中川秀恭／7

大学セミナー・ハウスの30年(スライド)／8

《記念シンポジウム》

教養と専門教育からみた現在の大学改革／10

■法人ニュース／12

■千人会・おたより・寄付／12・13

■業務通信／14

開館30周年記念特集「私と大学セミナー・ハウス」

グループエンカウンター誕生の地●國分康孝／14

ゴールデンウィークの合宿演習●齊藤 孝／14

開館記念セミナーからの30年●並河一道／15

■利用状況／15

■館長室から／16



Plain living and high thinking

財団法人 大学セミナー・ハウス  
INTER-UNIVERSITY SEMINAR HOUSE, INC.

## ECからEUへ—ヨーロッパ統合の構図—

成蹊大学文学部教授 仲井 斌

私は、ちょうど「プラハの春」の一九六八年に、学生運動華やかな西ドイツへ渡ったいわば六八年世代です。そして二十五年間ドイツに滞在し、九三年に帰国しました。

一九八九年の東欧革命は、「終焉の時代」の始まりとして重要です。コミニズムの終焉、東欧共同体の崩壊の発端であり、ヤルタ体制および冷戦構造の終焉をもたらしたからです。さらにソ連邦の終焉、中立主義やイタリアの第一共和制、そしてドイツの分断が終焉した一連の動きは、ヨーロッパ秩序の基本的変化という意味で、二〇〇年前のフランス革命に比較される歴史的な地殻変動ともいえません。そして一九九四年には、激動の「終焉の時代」が終焉しました。

## ●ヨーロッパ統合の特徴と背景

現在地球上では、NAFTA、APEC、CISなど地域経済化、ブロック化がブームですが、それらとEC・EUの統合は基本的に違いがあります。ヨーロッパ統合は、まず最も古い歴史を持ち、他の統合と比較にならないほど進んでいます。また政治的な連携は国家の主権に抵触するところまで及び、EU委員会という名の行政機構、議会や裁判所など国家の形態に準ずる制度・機構があります。さらに通貨統合に象徴される将来のビジョンを持っています。ヨーロッパ連邦は実現しないでしょうが、これらの特徴はヨーロッパ統合を他の地域の経済協力関係と基本的に異なるものにしていきます。

西ヨーロッパが統合に向かった背景には三つの側面があります。第一に、戦争の結果、西欧諸国の経済が疲弊し、一国経済体制が困難になり、国家を越えた経済協力と統合が求め

②

られたこと、第二に、戦争およびナシヨナリズムへの反省から、様々な統合の思想が政策形成に作用したこと、第三に、トルーマン・ドクトリン以後、東西の対立が激しくなり西ヨーロッパ諸国の安全保障が求められたこと、です。

このような共通の意識の下で統合がはじめて具体化しますが、なによりも歴史的に常に敵対関係にあったフランスとドイツの利害関係が一致したことが統合の出発点でした。フランスは西ドイツの経済力を利用して政治力を誇示したい、また西ドイツを統合に巻き込めば、西ドイツとソ連に対して二重の安全保障になると考えました。一方、西ドイツのアデナウアー外交の基本は主権の早期回復でしたが、そのためにも早期実現が不可能にも見えたドイツ統一よりも西ヨーロッパ統合にオプシオンを見出し出したわけです。

ヨーロッパ統合は、一九五一年にフランス・西ドイツ・イタリア・ベネルクス三国の六カ国によるヨーロッパ石炭鉄鋼共同体から始まりEEC、ECへと発展します。それは、何よりも冷戦期の西ドイツとフランスの協調の産物でありました。

## ●統合の深化と拡大—ポスト冷戦への胎動

ヨーロッパ統合には深化と拡大という二つの方向軸があります。深化は、統一規範あるいは共通規範の分野が増大することで、たとえば関税撤廃、共通農業政策、「EC92」による共通市場の実現、通貨統合などが重要です。拡大は加盟国が増えることで、ECは八六年にスペイン、ポルトガルが加盟して十二カ国となり、九四年から十五カ国(EU)になりました。

一九八五年は、東ではソ連でペレストロイカが始まる一方で、西ではドローレEC委員長が「域内市場統合白書」を提出し「EC92」が始まる年で、統合の深化と拡大に重要な意味がありました。「EC92」は、九二年までに工業規格の統一など非関税障壁をなくし単一市場を作るのが基本目標でした。九一年十二月、ソ連邦の解体と併行して、統一ドイツを含むEC首脳は、深化を加速化すべくマーストリヒト条約に調印しました。この条約は冷戦後の統合のあり方として必然的に生み出されたもので、統一通貨の実現を核とし、ECの統合を質的に一段と越える方向を目指しました。

## ●ドイツ統一と統合の変質

ドイツの統一は、ドイツとフランスの力のバランスを変えました。フランスにもイギリスにもドイツが再び中部ヨーロッパの強国に変質するかもしれないという危機感があり、両国はドイツの統一を望んでいたとはいえません。そこでサッチャーはフランスと組んでドイツを牽制しようとしています。しかし統一を不可避と判断したミッテランは、ドイツを取り込んで統合をより深めることで将来の脅威を解消しようと考えました。結局EC内でミッテランの意見が強まり、フランスのイニシアティブの下で、EU(欧州連合)が生まれます。

フランスは、ドイツをEC内に留めて自国を凌ぐ政治力や影響力を持たないようにしたい、そのためには欧州連合を結成し、統合をより深める以外にない、特にドイツ経済の支配力を転換する意図をもって、マルクを止揚する通貨統合を急速に進めることを提案しま



なかい たけし

1935年生まれ。1968年からドイツに在住し、ボン大学で博士号を取得後教鞭をとる。1993年に帰国し、現在成蹊大学文学部教授。著書に『現代ドイツの試練』、『ヨーロッパの外国人問題』など。

す。ドイツはそれにある程度の抵抗を試みましたが、コールは統一ドイツの支持獲得と引換えに将来におけるマルク放棄を国内で説得して、その結果マーストリヒト条約調印が実現するわけです。ただしドイツ国内の反対は強く、連邦憲法裁判所へ違憲提訴があつて条約は九三年十一月ようやく発効を見ます。

### ● 統合の不安定要因―強大化したドイツ

ちなみにドイツ、フランス、イタリアはシャルルマーニュが統一したフランク王国があつた地域です。またベネルクス諸国もシャルルマーニュの帝国の版図にありました。ヨーロッパの原型をフランク王国とするならば、今日の統合もまたかつてのフランク王国の領土から始まり、それが核となつて西へ、次に南へ、北へと延びていきました。そしてポスト冷戦期では東に延びていきますが、東端は北ではバルト三国、南ではスロヴェニア、クロアチアまでかと思ひます。

EUの拡大についてフランスは、連合条約を結んでいる東欧諸国が加盟してきますとドイツの力を強めることになることから積極的にではありません。ドイツは深化と拡大の両方に積極的です。統一後のドイツは、フランスと比べて相対的に人口や経済力においてさらに優位に立ちました。

二十一世紀になつても独仏関係がマーストリヒト条約の延長線上にあるとはいえないかもしれません。シラク大統領が、今まで以上に統合に熱心になるとは考えられません。またサントールEU委員長が前任者のドロール委員長以上のリーダーシップを発揮するとは考えられません。中部ヨーロッパ経済に絶対の影響を持つドイツがフランスとのバラン

スを崩さない努力をしてヨーロッパ統合の核になるのか、ヘゲモニー・パワーになつて対立が起きるのかは将来の問題ですが、いずれにせよ独仏関係の基本構造は変化しました。

### ● 市民不在、アイデンティティなき統合

ヨーロッパ統合にとつて、国家主権に関わることは大きな難関です。最近、国民国家の克服ということがEUを例にして言われていますが、十七世紀以来確立してきた国民国家は簡単に崩壊しないと思ひます。現実の崩壊は理論的な崩壊よりも困難です。多民族国家が崩壊した東ヨーロッパでは、むしろ国民国家を形成しようという志向がみられます。

またドイツとフランスはいわば原理主義派で、政治の分野も含めてヨーロッパ統合を進めようとしています。しかしイギリスは功利主義的で、国家主権に触れない政治抜きの経済の統合と自由貿易を主張しています。また加盟国の拡大は、間接的にイギリスの主権を保障するという論理で閉鎖的ではありません。つまりそれによつて主権を守ろうというわけです、運命共同体か利益共同体かという大きな対立点が存在しており、国民国家の克服は簡単ではありません。

ヨーロッパ統合は、残念ながら国民抜きで進められてきました。ヨーロッパ統合を推進したのは、各国の政治エリートとEC・EUのトップ官僚です。EU委員長は各国首脳が決め、各国国民は欧州議会の自国の議員とその活動についてあまり知らされていません。これではEUに国民、市民レベルにおいて権威があるのかはなほ疑問です。だから、たとえばデンマークの第一次国民投票ではマーストリヒト条約反対が多数を占め、統合推進

の核国であるフランスでさえ賛成と反対が五分と四分という僅差でした。

こういった市民の抵抗に対処するために、EUの分権化ともいふべき補完制の原則(subsidiarity)が持ち出されました。これは決定事項をできるだけ地方、州の段階にまかせ、それが不可能な場合は国に積み上げ、国でできないことをEUに移管するという原則です。これはある意味で国家の役割の見直しですから、末端の権限の見直しとともに統合の方向と矛盾するところもあります。それは統合が一般市民の意志と無関係に進められてきたことによる大きな溝といつてよいでしょう。

挑発的なことを言いますが、EUの解体は絶対にありえないとは思ひます。EUの加盟国は、ギリシャを除けばカトリックとプロテスタントで文化的に統一された側面を持っています。しかしEUは人工「超国家」の性格をもち、ソビエト人やユーゴスラビア人がフィクションであつたように「ヨーロッパ人」というのも地域概念、ある種の共通文化概念としてしか存在せず、統一された民族的文化的アイデンティティはありません。それが多民族国家が崩壊した政治的、文化的理由ならば、EUにも同じことがいえないこととはありません。

またヨーロッパには、移民が大量に流入しています。多文化社会になつた地域としてのヨーロッパと先住ヨーロッパ人の意識との間に乖離が進んでいます。やがてはヨーロッパおよびヨーロッパ人の新しい定義が必要になるでしょう。ヨーロッパは一つであつて一つではありません。そこに統合の難しさがあるのではないかと思ひます。

(文責・編集者)

# ヨーロッパのアイデンティティ

## ——統合の現在、その光と影——

### ▼ゲスト講演

ECからEUへヨーロッパ統合の構

図一

成蹊大学文学部教授 仲井 斌氏

### ▼講義と演習指導

1 国民国家体制から統合ヨーロッパへ

東京大学教養学部教授 木畑洋一氏

2 ヨーロッパ統合と地域問題の変容

立教大学社会学部教授 宮島 喬氏

3 ヨーロッパ統合と新しい市民社会の

形成

明治学院大学国際学部助教授 伊藤るり氏

4 英語支配と少数言語文化の擁護

女子美術大学芸術学部助教授 原 聖氏

### 【運営委員】

立教大学社会学部教授 宮島 喬氏

【参加者】43名21校（内女子22名）

日本（4名）、東京・早稲田・慶応義塾・

成蹊（各3）、一橋・お茶の水女子・青山

学院・明治学院、武蔵（各2）、東京外国

語・名古屋・奈良女子・日本女子・中央・

東京女子・上智・東洋英和女学院・立命

館・独協・放送（各1）、その他（6名）



統合ヨーロッパの建設、これは地球の一角で起こりつつあるもとも注目すべき「革命」だろう。「静かな革命」だとしても、その歴史的意義からすれば未曾有の革命ではなからうか。ジャーナリズムはとかく市場、通商、外交

の面のみからEUの動きをとらえがちだ。だが、私たちはもつと全体の視点からヨーロッパ統合の意味をつかまなければならない。

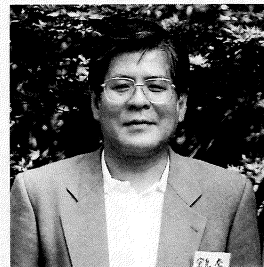
世界史上典型的なかたちで成立した諸西歐「国民国家」が、自らの意志で主権の制限、委譲へと歩を進め、新たな統合空間を創りだそうとしている。市場統合はもちろん重要だが、それは一つの次元にすぎず、地域と地域間関係が変容し、「国民」から「EU市民」への転形が進行過程にあり、文化・ライフスタイルの変化と再生がみられ、人権やアイデンティティに関わる新たな理念・課題が浮上している。まさに全体的な変動なのである。

だがまた、統合の理想がトータルなだけに、現実の側から幾多の困難が突きつけられている。南北経済格差、ベルリンの壁崩壊以降の新たな「東西」問題、人の自由な移動の理想と現実、超国家政治体によるデモクラシーの保障という難問、文化の「統合」の逆説など。ヨーロッパ全般をおおう経済の低迷もこれに影を落としている。理想と現実の関係がまさに「光と影」の対照として現れているといえようか。そして、この対照がそれぞれの国民、地域住民、文化的少数者、移民、女性などのアクターによってどう経験され、受け止められているのか。

地域研究を志す大学院生を中心に、特定の地域ではなく、問題群を中心にセミナーを組み立て、議論したことによって、大学院共同セミナーの目的、すなわち大学院教育の抱えている高度に専門分化された状況を打破し、広い視野の中で専門を究める場を提供することを十分に達成したといえよう。

### ヨーロッパ統合の意味を根底から

——大学院共同セミナーを企画して——  
立教大学社会学部教授 宮島 喬



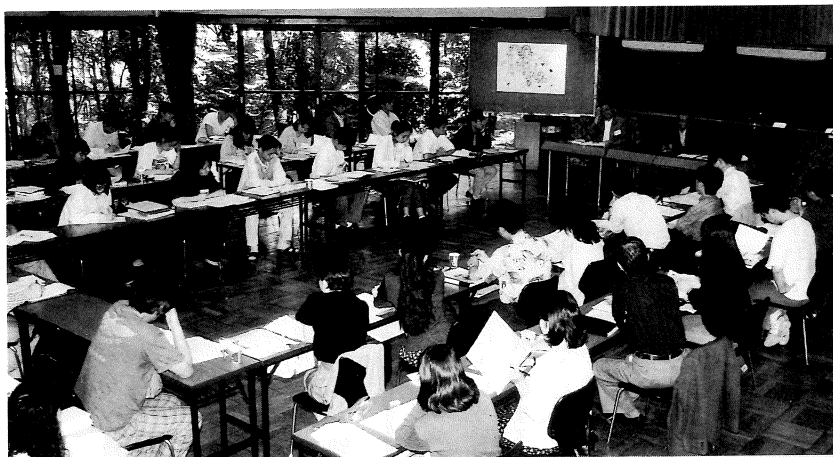
ヨーロッパ統合。これは二〇世紀最後の一〇年を飾る間違いなく世界的出来事であり、あらゆる角度からその意義を検証していく必要がある。これが、運営委員の私と四人の講師の共通の認識だった。大学院共同セミナーとして企画したのは、このテーマの重要性に加え、ヨーロッパ研究を専攻する各大学の院生が日頃共同フォーラムに恵まれず、そうした場が必要だと考えたためである。

講師の方々もそのことを念頭に、充実したビデオを添えたレジュメを用意してくれ、参加者を迎えるこちらの態勢は大いに自信があった。が、果たして応募者が定員に満ちるか、心配でなかったといえれば嘘になる。フタを開けてみたら43名と予定をオーバー。テーマの意義を参加者がしっかり受け止めてくれたのだらう。わざわざ関西や名古屋から駆けつけてくれた院生もいて、感激した。

「光と影」の副題について一言。ここ一

年ほどをふり返っても、オーストリアなど三国の加盟による「ユーロップ・オブ・ファイフティーン」の誕生、国境検問の廃止による自由移動システムの定着など、注目される出来事があった反面、経済の低迷と国家利害の食い違いから通貨統合に赤信号がともり、また、移民・難民への厳しい措置がとられ「人権のヨーロッパ」に陰りがみえるなど、「影」の部分も濃さを増した。フランスでは国家主権をより重視するドゴール派シラク大統領が誕生し、EUをこれまで支えてきたパリ—ボン枢軸にきしみが生じそうな気配がある（同大統領の核実験再開宣言もその一つだが、セミナーの時点ではまだ公にならず）。この「光と影」両面に参加者たちはそれぞれに認識をもっていて、特に「影」の部分について「へ国境なきヨーロッパ」というが、現状では国家の論理の再生産が明らか」といった意見が多く出されたことを、まず報告しておく。

仲井氏のゲスト講演は、戦後五〇年のヨーロッパ政治の展開のなかでEC、EUの成立の意味をダイナミックに論じ、統合の「深化」を目ざす動きと、その「拡大」を指向する動きを対比し、特に大ドイツのこの点での位置どりのジレンマを指摘した。東欧、北欧、トルコなど、今やEUは広大な地域と関わりをもつことになったが、それが統合の深化と両立するのか否か。参加者たちに考えさせる大きな問題を投げかけた。



とかく市場、通商、外交の面のみからEUの動きをとらえがちだ。だが、もっと全体の視点からヨーロッパ統合の意味をつかまなければならない——白熱したシンポジウム風景（講堂にて）

各論的にふれてみる。国民国家からEUへ。このテーマで木畑氏が歴史的に内容をあとづけ、ヨーロッパにおける国家の今後について考えるいくつかの示唆を与えてくれた。ヨーロッパ統合の意義を捉える前提として特に重要な点だから、議論も活発だった。「国民国家とは？」という議論。次いで、統合ヨーロッパは国家を超える世界なのか、それとも国家の論理が生きつづけるのか、悪くすると帝國的拡大の世界となりはしないか等々。「地域」という空間がヨーロッパの中でどんな意味をもち、どんな問題を抱えているのか。これについては私が問題提起をしたが、焦点は地域間の格差、紛争の問題であった。今後のヨーロッパで地域に関わる民主主義の条件として、格差は正の政策、分権システムの導入、紛争解決の枠組みづくりが必要だというのが私および院生の共通の認識となった。アルザス、コルシカ、カタールニアなどの地域の専門研究に携わっている院生が、問題について具体的な発言をしてくれたのは有意義だった。

移民、難民、女性。伊藤氏は、これらマイノリティーズにとつてヨーロッパ統合とは何を意味するかを具体的データをあげながら論じてくれた。「人の自由移動」の体制の中で移民労働者の権利がまだまだ課題を残していること、女性については差別の問題とともに、欧州レベルでの権利保護のあり方にも注目すべきことが強調された。参加者からは移民問題に質問、意見が集まり、関心の高さをうかがわせたが、女性の問題については初めて議論とデータに触れた参加者が多く、それだけ触発的意義は大きかったといえよう。

原氏は、社会言語学的観点から「英語支配」という問題を取りあげ、ヨーロッパ統合の一つの隠された論点を照射した。こと文化については、「統合」という観念はむしろ危険に満ちており、ヨーロッパの反応は単純ではない。寓意を秘めつつ、「英語支配」の問題点を論じた氏

の議論は、日本の文化の状況にも関連してくるものがあり、いろいろと考える材料を与えてくれた。

参加した院生たちの研究テーマには、尋ねてみると、EUと食糧問題、地中海一地方のカーニヴァルの研究といった、講師の守備範囲を超えるユニークなものもあった。また、学部の四年生や研究生で参加した者には、講義と討論がやや専門的すぎ、戸惑いがあったように思う。しかし、これらの参加者も、私たちの挙げた参考文献をきちんと読み、熱心に討論に耳を傾け、臆せず質問をしてくれた。セミナーに参加して、それぞれに有益なものを学んでくれたにちがいない。

参加者のなかには今日の世界の地域再編に関心をもつ国際政治や国際関係の専攻の院生もいて、活発な発言をし、討論をリードしてくれた。かれらも、この機会に、北米自由貿易地域やASEANなどに比べ、市民権や労働市場の開放にまで進んだはるかに深化した統合の段階にあるEUについて、認識を新たにしてくれたと思う。

「日本に在って、なぜヨーロッパ統合に関心をもち、研究するのか」。最終日の総括討論で、一参加者からこの「なぜ」が改めて問いかげられた。参加者の答えは色々だったし、答えは各人各様であったよと考える。私の希望としては、日本の現状を振り返るよすがとしてヨーロッパ研究を進めるといふ姿勢をどこか

でもってほしいと願っている。へ単一民族の神話がまだ払拭されず、国際化が叫ばれつつも、近隣諸国と真の信頼関係を築きえないでいる日本にとり、ヨーロッパ統合の教えてくれるものは大きいはずである。

このセミナーをきっかけに、院生たち相互の研究交流のネットワークが生まれそうであり、私たちも今後引き続きそのお手伝いをしていきたい。



前右列から三人目より、原聖・木畑洋一・岡（館長）・仲井斌・宮島喬・伊藤るりの各氏——ようこそ広場にて

## 印象に残ったヨーロッパ統合の深化と拡大

武蔵大学人文学部社会学科三年 関谷知美

私は、学部三年生でありながら、「テーマが面白そうだから」という安易な理由で参加しました。講義が始まるやいなやその内容のレベルの高さに軽率な気持ちで参加したことを後悔しましたが、「せっかく来たのだから何かを得て帰らなくてはもったいない」と自分に言い聞かせ、不安を抱きつつ講義に集中しました。

講義の内容は、大学の講義よりも濃くて、たいへん興味深く聴くことができました。なかでも一番印象に残ったのは、仲井斌先生が講義のなかで何度も繰り返された「深化と拡大」です。深化は質的なこと、拡大は量的なこと、この二つがあつてヨーロッパの統合が実現されるということでした。この「深化と拡大」は、ヨーロッパの統合だけでなく、様々な事柄に当てはめて考えることができると思います。私がこれから研究を進める上でも「深化と拡大」が必要不可欠なのだと感じました。今ある知識をさらに深め、そして様々な知識をもっと多く得ることが今の私に必要なことだと思いま

す。

もう一つ私が印象に残っていることは、最終日の総括討論で議論になった「日本におけるヨーロッパ研究の意味は何なのか」ということです。このことはヨーロッパ研究だけではなく、多くの研究についても考える必要があるのではないのでしょうか。私は、社会に還元することができない学問だけが必要なのだとは思いません。一見すると全く無意味なことのように、気付かないところで役立っていることもあります。結局、納得のいく結論は得られませんでしたが、私は二泊三日のこの共同セミナーを通して、熱心な参加者の皆さんに囲まれて自分の未熟さに改めて気付かされ、良い刺激になりました。素晴らしい機会を与えて下さった講師の先生方に感謝します。

## 複雑なアイデンティティ、多様な性への自発的容認と理解

日本大学大学院国際関係研究科修士課程

藤村英詳

「ヨーロッパ統合」という語はダイナミズムを感じさせる。私は興味本意でこのテーマに注目したが、基礎研究を始めると統合に対する自分のスタンスを決定することが難しい。統合が進展しても停滞してもいずれにせよ問題が発生するというジレンマに直面するからである。

第一に、構成地域の拡大や共通政策領



前夜提出したレポートを発表する参加学生—最終日の総括討論（講堂にて）

域の深化といった統合のシステムティックな進展が見られた場合でも、必ずしも統合という求心力によって収斂に至るとは限らない内部での多様なアイデンティティをどう扱うかが問題となる。第二に、欧州の国際競争力強化という観点で見ればアイデンティティの相克による統合の停滞は、域外政策戦略的な意味合いから危惧されるであろう。

これら複雑なアイデンティティの存在とその波及効果は、最終的にはそこに居住する人たちが統合システムを動かすことを端的に表している。ところがこの点に着眼することが重要であると感じつつ、私のアプローチ方法は完全ではない。今回のセミナーでは幸運にもそれが

クローズアップされていたので、参加した次第である。

では、右の点を踏まえて、自分なりに考えたことを以下の三点にまとめて締めくくりたい。

第一に、欧州統合の中枢を担うEUの欧州での多様な価値観を容認する能力を今後問いかけていく必要がある。アイデンティティの出所は国家やそれに従属する地域、さらに私見だがトランスナショナル地域、とカテゴリーが多元的であり、人為的なヨーロッパ・アイデンティティへの集約だけでなく、エスニックな価値との重層性を鑑みるべきである。

第二に、従来の国民国家の中では必ずしも注目の行き届かなかった存在が、欧州統合の中でどう位置づけられていくかを綿密にフォローしていく必要がある。国家の中の地域がEUに何を求めるか、あるいは女性や移民の権利が拡大するかといったトピックはこれに該当すると思われる。

第三に、言語・宗教・文化に起因する欧州の価値観の多様性を考察することが、ひいては我々自身の価値観を再考することにつながる点を確認する必要がある。異なる存在に如何なるベースベクトイブをもつか？ 多様性への自発的容認と理解が容易となるなら、そこにヨーロッパ研究の一つの意義が見い出せると言えるであろう。

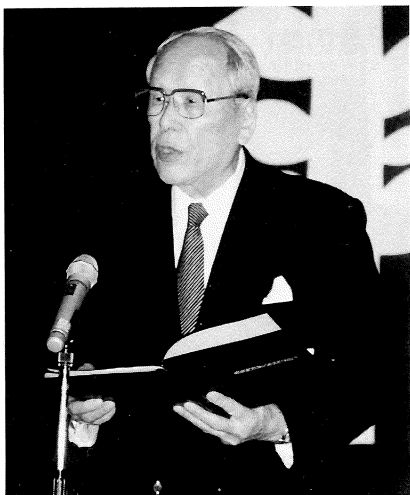
# 特集Ⅱ開館30周年記念の集い

梅雨あけやらぬ天候の中ながら、この日に  
 参集された当ハウスゆかりの方々には二百余名。

まず中川理事長の懇篤なあいさつにはじまり、ついで岡宏子館長の解説によって大学セミナー・ハウスの30年間の歩み―創立の経緯から現在に至るまでの活動状況をスライドを駆使し、振り返るといふ、いわゆる形式的な式典とはひと味違った和やかな中にも意義深い「集い」となった。

第二部の記念シンポジウムは、「現在の大学改革」の中心を衝いたもの。提言者、討論者の本音を語る率直な論点にフロアからも鋭い意見の開陳があり、現代の大学問題に対する国公立の枠を超えてともに考え合うというセミナー・ハウスが果たしている役割をさまざまな示してくれた。

休憩後懇親パーティーに移ったが、久々の出合いにあちこちで久闊を叙し、和やかな談笑の中で、まさしく「出合いの場」の盛り上がりの中で閉会となった。



## 開館30周年を迎えるにあたって

大学セミナー・ハウス理事長 中川秀恭

本日ここに「財団法人大学セミナー・ハウス開館30周年記念の集い」を催すことになりましたところ、協力会員校・準協力会員校である国・公・私立大学、並びに短期大学の学長、教授、ハウスと縁の深い各種団体代表の方々、近隣の方々など二〇〇名に近い皆様のご臨席をいただくことができました。はじめに皆様に厚くお礼申し上げます。

当ハウスが財団法人として文部省から設立認可を受けたのは昭和三十七年（一九六二）三月三十一日でしたが、その設立趣旨には次のようにうたわれています。  
 「新しい時代には新しい形式の人間形成の方法が創造されるべきである。セミナー・ハウスは指導教授を中心とする学生の小さな集団に対し、研修、交際の場を提供することを主たる目的とし、そのために合宿的集団生活の形式をとる。他方同じ又は関連のある学問分野の研究者や学者あるいは各大学の行政者が、セミナーを開くためにも国公立を越えた立場の施設が望ましい、セミナー・ハウスは大学相互の諸活動を円滑にすることを第二の目的としている。これを要するにセミナー・ハウスは大学という機構の外にあって、大学教育並びに大学相互の交流に協力する奉仕機関である。」この趣旨を今もってここに思い起こします。

ハウスの施設、設備が整い、活動をはじめたのは、昭和四〇年（一九六五）七月五日のことでした。爾来今日まで30年、ハウス運営の衝にあたった先人達は、この設立の趣旨を堅持してゆめがず、これに沿って活動を続け、今日の隆盛の基礎をおかれました。

この間、国・公・私立大学の教員、学生、学術団体、外国人特に東南アジアの学生、社会人の利用者は増加の一途をたどり、本年六月末日をもって二九、三五六団体、宿泊延人数一、四二五、五三〇人に達しました。そうして、幾多のすぐれた人材が世に出て行きました。

このように当大学セミナー・ハウスはわが国のみならず、世界にも類を見ない施設として、きわめてユニークな活動を続けて参りました。今後ますます充実したプログラムを展開、大学教育を側面からお助けすることでありましょう。

ただ、30年の年月は、諸々の施設、特にベニヤ板作りのユニット・ハウス、〇棟の老朽化とともに各施設の設備も、いよいよ大きな更新に踏み切らなければならぬ事態となっております。

願わくば、何らかの方途によってこれらの施設を更新し、より一層充実した活動が続けることができますよう、そして当ハウス創立の趣旨をより一層豊かに發揮することができますよう、この上ともお力添えをいただきます。

この30年の年月の間にいただいた文部省、財界、協力会員校、準協力会員校のご支援、また館長を中心として企画・運営・実施にたずさわって来られた各種教育プログラムにご奉仕された各大学の教授の方々、ハウスを研修の場として利用して下さった教授の方々、それからハウスの設立の趣旨にご賛同、永年にわたって財的援助を続けて下さる千人会の会員各位に対して厚く御礼を申し上げます。

## ▼プログラム

一九九五（平成七年）年七月八日

受付開始 (12時30分)

第一部 記念の集い (13時～14時)

〈司会〉 上智大学教授 三輪公忠

◇ご挨拶 大学セミナー・ハウス理事長 中川秀恭

◇ハウス30周年の歩みをたどる 大学セミナー・ハウス館長 岡 宏子

第二部 記念シンポジウム (14時10分～16時45分)

教養と専門教育からみた現在の大学改革

〈司会〉 大学セミナー・ハウス館長 岡 宏子

〈提言者〉 京都大学教授 山本利治

東京大学教授 平野健一郎

北陸先端科学技術大学院大学学長 慶伊富長

筑波大学教授 中村紀一

〈討論者〉 国際基督教大学教授 絹川 正吉

北陸先端科学技術大学院大学教授 示村悦二郎

株式会社西友代表取締役専務 坂本春生

記念撮影、施設見学 (16時45分～17時30分)

第三部 懇親パーティー (17時30分～18時30分)

〈司会〉 慶応義塾大学教授 山岸 健

◇乾杯・挨拶 民主教育協会会長 天城 勲

◇合唱と演奏 早稲田大学教授 小山宙丸

東京純心女子短期大学音楽科専攻科有志 一橋大学名誉教授 板垣與一

◇スピーチ 大妻女子大学教授 佐野博敏

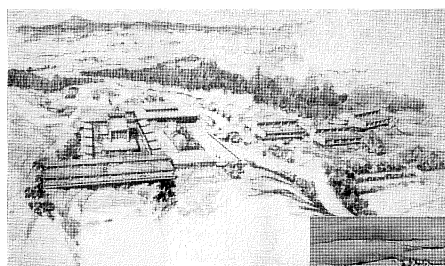
◇あいさつ 岡 宏子



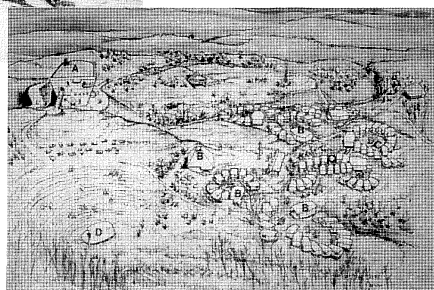
敷地を視察する永井道雄、飯田宗一郎、吉阪隆正の諸氏



30年の歩みを振り返る岡宏子館長

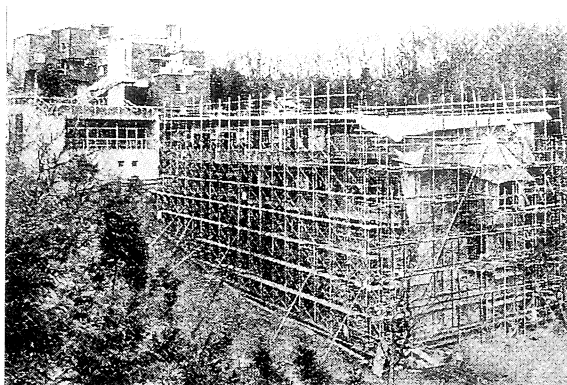


最初の設計案（上）と現在の構成となる設計（右）



開館記念第1回大学共同セミナー——永井道雄、加藤秀俊、川喜多二郎の三氏と学生たち（本館を背景に）

⑧



学生交流の輪を世界に広げる——建築中の国際セミナー館



教師館の完成と真理の鐘をつく佐藤喜一郎氏



大学院セミナー館の完成。感謝の記念品が当時の飯田館長から吉阪隆正氏に贈られる

施設が次々と建っていく

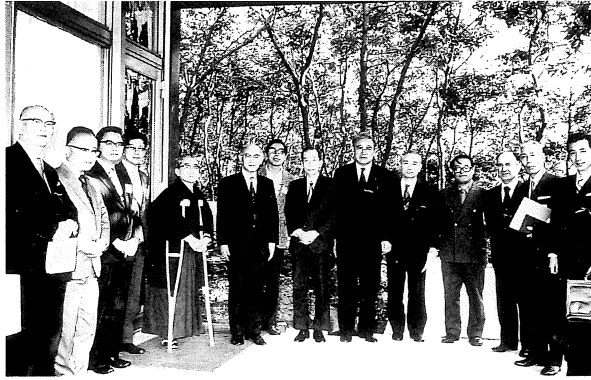
大学セミナー・ハウスの三〇年  
スライドで改めてその歩みを辿る

現在の木々に囲まれた構内とはまるで趣の違う薄の原を視察する委員の面々の写真は、皆様に一応おなじみのものであるが、募金趣意書にあった最初の設計と現在の吉阪氏の全体構成が示されるとあちこちから「ホーツ」の溜息ももれてきた。上は次々になされた施設拡張の姿の一コマ。



## 活動の拡充

一〇周年、一五周年、二〇周年の記念式典とその時々々の活動の状況も順を追って写し出されて。



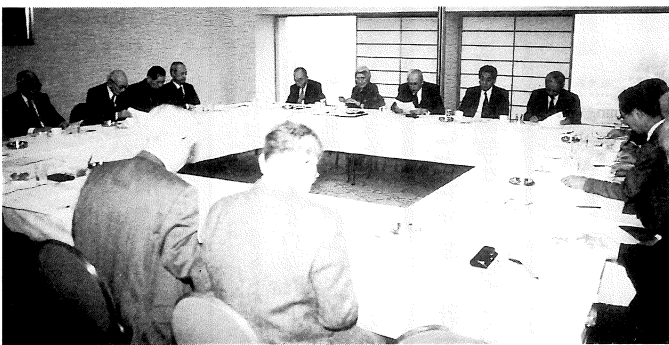
10周年記念会で——正田健次郎、大塚久雄、板垣與一、安嶋弥、中嶋嶺雄、木村尚三郎、広野良吉の各氏が見られる



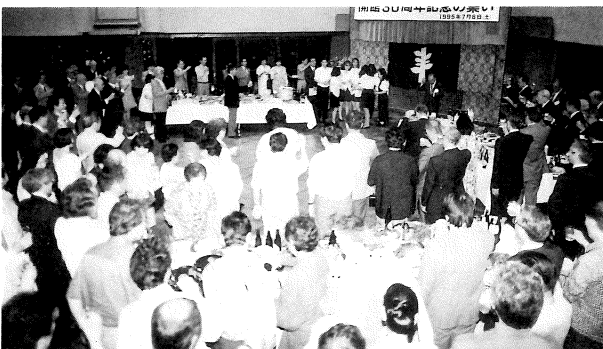
開館20周年記念館完成でテープカットをする中川秀恭理事長と天城勲理事



加藤六美氏のお手前でお茶をいただく顧問会のひととき——記念館茶室にて



現在の法人理事会・評議員会の模様



東京純心女子短大生有志による演奏と合唱を聴きながらの記念パーティー



記念の集いを終えて、全員で記念撮影——講堂にて

### ●主なる来賓者（敬称略、順不同）

安達新、青木道子、浅野正行、天城勲、綾部正樹、有山正孝、井早康正、飯尾右一、飯田宗一郎、飯田恵、生山智己、石井栄治、石井竹松、磯田浩、板垣與一、伊藤清子、伊藤繁、伊藤寿昭、伊藤孝子、岩井清治、岩佐幹三、上真幸平、上野純子、植田実、内田勝、海老原正行、小川正浩、小幡敏信、大木昭男、大喜多敏一、大口邦雄、大竹十一、大竹奈月、大津山壽久、大野澄子、大福族生、大森東亜、大山乃富子、大吉芳彦、沖田裕生、荻野時尚、奥山正司、長田洋子、加藤六美、角戸正夫、笠井伍朗、風間邦光、金元哲夫、河田喬夫、川端香男里、神門武弘、木田宏、木寺博子、木村正俊、木目さとみ、北田英治、北村昭典、絹川正吉、慶伊富長、小泉資朗、古松弥生、小山宙丸、腰原真知子、合田信子、後藤栄造、佐久間好美、佐々木一也、佐々木良一、佐藤康司、佐藤玉枝、佐藤豪、佐藤ナツ、佐野博敏、佐藤有子、齊藤大也、齊藤孝、齊藤祐子、坂本春生、坂本光子、清水一彦、清水義久、塩脇裕、篠田節子、島田治夫、島田幸男、示村悦二郎、下浦享、城内哲彦、城塚登、新城信枝、杉浦銀治、鈴木皇、鈴木侑、鈴木博、鈴木裕子、酢屋善元、十代田知三、田川宏、田坂興重、田島澄江、田中成志、田辺隆一郎、妙摩光代、滝沢健児、竹下昌利、土田美芳、樫阪信弥、伝田順子、所伸郎、富田玲子、内藤昭一、中嶋嶺雄、中富光圀、中西又三、中野スミ子、仲野友子、中林透、中村紀一、中村孝俊、中村哲哉、中山昌、長沼英明、並河一道、西幸一郎、西田亀久夫、西脇威夫、沼野洋、野崎昭弘、野沢辰、萩生田富司、橋本研一、波多江茂樹、波多野重雄、服部克彦、服部健雄、原一雄、春井裕、日秋俊彦、樋口裕康、秀島武敏、平野敏右、平野健一郎、平松秀夫、比留間敦子、広内哲夫、布施涛雄、福富政次郎、伏見康治、藤崎晴男、藤本紘、保坂純子、堀川清司、本間正人、松岡信之、松崎義徳、松沢正夫、松田藤三郎、丸岡俊之、丸山友一、水野弘文、三野智章、三宅彰、三宅豊彦、宮野彬、宮本美沙子、三輪公忠、村上健、村上光雄、茂木光子、望月清司、森玲子、森下展行、森島伸夫、矢島矩雄、矢内秀幸、八杉貞雄、安田尚之、矢内秀幸、山浦恭子、山岸健、山口惇、山本和代、山本武利、山本武彦、山本利治、横林康平、吉阪ふく、吉田美穂子、吉田幸弘、芳山邦弘、鷺尾弘美。

■記念シンポジウムⅡ発言要旨

# 教養と専門教育からみた現在の大学改革

## 看板を替えただけの教養部改組

●山本利治（京都大学教授）

京都大学の教養部は、平成四年十月から総合人間学部へ改組した。教養科目は単位を取りさえすればいいという学生の考えを、何とか防ぐことが今度の改革の大きな動機であった。



従来の人文・社会・自然科学をA群B群C群と改め、それを学部毎に随時自分たちのコースに合わせて4年間教育という形で実現することが主目的であったが、ここにも表れているように、看板を変えただけという趣がある。

しかし「全学共通科目」として、横断的に、全学的にそれを提供したことは改革の大きな特徴でもある。すなわちある学部学生にとっては専門科目だが、他の学部学生にとつては一般科目という形で自由に取れるシステムである。この全学共通科目は、ロケットで言えば、第三段ロケットで、これを切り放したらおそろくうまくオービットを廻れないのではないか、パタパタと地上に落ちてくるのでは

## 変えないことも改革。新カリキュラムは学生への迎合では？

●平野健一郎（東京大学教授）

東京大学の教養学部改革に反対ではないが、賛成はしていないという立場だ。設置基準の大綱化は、変えても変えなくてもいい、というのが趣旨のようである



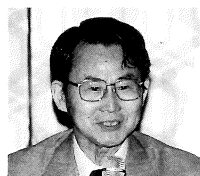
が、その精神を汲み取れば、教養学部は基本的に変えないことが改革であろうと確信したし、今もそう考えている。

前期課程のカリキュラム改革は、私の体験に基づいて評価すれば、大学教育の大幅なグリードダウンである。駒場の学部二年間は受験勉強の毒消し期間々という役割を果たしてきたが、高校の延長のような授業であるという学生の批判に教員側が負けてしまった。たとえば方法論基礎は三系列三教科時代のなれの果てだが、現在ではほとんど話題にもな

## 教養主義と一般教育の挫折は重なっている？

●絹川正吉（国際基督教大学教授）

一番問題なのは、何のために改革しているのかがちつとも見えてこないことだ。いみじくも今日は「教養」という言葉は出てくるが、「一般」という言葉が



まったく出てこない。この二つは重なりつつ重なっていない。重ならないところで、一般教育といふ言葉を使って、戦前のいわゆる教養主義的な文化を乗り越えようとしたのだが、それが今はっきり挫折した。

にもかかわらず依然として出てくる言葉は教養教育をしなければならないということだ。

教養という言葉が問題になっている日本の学校文化、大学文化の歴史を反省しなければいけない。

一般教育が挫折したことに対する罪責告白は誰がやるのか。教養主義と一般教育の挫折は重なっているのではないか。そういう視点で問題を取り上げることはない。学生のライフスタイルが戦前の教養主義的、修養主義的なものとはすっかり変わっているにもかかわらず、依然として旧制高等学校時代の「教養」という言葉を使って教養教育をしようとしている。それを現在のやり方の言葉で展開してみせているが、依然として学生はそれに乗ってこないのではないか。

## 真の専門家養成は大学院大学で

●慶伊富長（北陸先端科学技術大学院大学学長）

大学院大学は真の専門家の養成をめざしている。研究者が高度の研究能力を背景にした教育をしなければ大学院は成立しない。しかし、人材養成に無関係な研究機関でもなければ、研究に無関係な単なる文献の集積場でもない。両方を組み合わせ



た、明らかに人材養成機関である。その目的を達成するための組織体はいかにあるべきか。研究者の研究内容に関しては組

織の管理は及ばないという形にするが、その研究を背景にした教官の教育からそのアウト

プットまでは管理の対象にするという組織体  
にしている。すなわち機能的組織体であり、  
共同体ではない。

教養の問題は組織の問題と教育としての必  
要性があるかないかという点が混乱している  
感じがする。どこの大学でも教養は大事だと  
いつているが、組織の旗をおろすことはその  
ウエイトを下げることになる。教養の教員が  
教養部は絶対支持だといって大騒ぎするこ  
とがあるかと思つて期待していたが、非常  
に静かだった。

## 教育組織と研究組織のジレンマ

●中村紀一（筑波大学教授）

筑波大学は教育組織として「群・学類」を、  
研究組織として「学系」を作った。しかし研究  
組織と、教育組織にはやはりどうしても対立  
が出てくる。学類が独立していいと、学類  
で教育上の必要性から教官を採りたいと考  
え  
ても、研究能力は学系が  
審査するので、うまくい  
かないことがある。これ  
が筑波大学における一つ  
のジレンマになってい  
る。



今や社会学類でも一八歳人口の減少で臨時  
定員増で増えた学生を、何とか定員を減らさ  
ないで新しい専攻などを考えているが、その  
場合、縦割りと横割りの関係が非常に難しい。  
たとえば社会学類では、法学、政治学、経済

学、社会学という四つの専攻があるけれども、  
旧来型の人たちはこれをそれぞれ独立させた  
いと考えている。ところが現代的な課題をど  
う学際的に扱うかといった、教養のようでそ  
うでない、しかも技術的な領域が出てくると、  
なかなかうまくいかない。それぞれの学間に  
は長い歴史があるわけで、それなりに残して  
おかないと困る場合が出てくる。縦横の中で  
一つの岐路に立たされている。

## 大学教育は教養と専門の教員 が共同責任で

●示村悦二郎（北陸先端科学技術大学院大学教授）

私を含めて専門の教員はいま弟が親から叱  
られているのを見て、横でおやつを食べなが  
ら黙つて、こちらにお叱りがこないのをいい  
ことにしているのではないか。設置基準改正  
に端的に表れた改革において、教養部が表に  
引っ張り出されて、さんざんこづき回されて、  
懺悔しろといつて姿まで変えさせられた。そ  
の間に同じ大学教員であ  
る我々は何をしていたの  
か。しめしめ弟が少しお  
となしくなったから、昨  
日まで半分部屋を占領さ  
れていたのをこの際ちょ



つと進出してやれ、と。ニヤニヤして、幸い今  
のところ誰からも叱られていない。これは本  
当にいいことなのか。罪は一緒ではないのか。  
つまり大学教育を支えているのは、教養の  
教員だけでも専門の教員だけでなく、皆の

責任であるはずだ。それを何とか一つのテー  
ブルにつこうとしたのが改革だと私は信じて  
いるけれども、一つのテーブルにつくどころ  
か、何人ずつかの中華テーブルが部屋の中に  
散在しているところへ、教養というテーブル  
をひきはがして、無理矢理、おまえはあっち、  
おまえはこっちと押し込んで、昔からの仲間  
のような顔をして一緒にご馳走を食べようや、  
といっているのではないか。

やはり大学教育は一つの文化である。それ  
をぬきにして、カリキュラムだけで議論をし  
て、果たして人間がうまく育てられるのか。  
大学の文化が本当の意味で日本の大学に育つ  
ていないのではないか。それは専門、教養に  
限らず我々大学人全ての責任ではないだろう  
か。

## これからは入学歴ではなく、 卒業歴を重視したい

●坂本春生（西友代表取締役専務）

企業の立場からいえば、どういう人材がほ  
しいかは時代によってまったく変わってしま  
う。これまでは能力の、お墨付き、すなわち、  
受験勉強にどれくらい堪えられたのかで、「大  
学出」ではなく「大学入り」を採用していた。

企業にゆとりがあったこ  
ろは、なるべく能力が高  
くて色のついていない人  
がほしかった。入社後に  
新人研修で教育すれば十  
分だと考えていた。とこ

ろが昨今、終身雇用が崩れてくるなど企業は  
大きく変わったし、また、外国との競争も激  
化してきた。  
大学に期待したいのは、能力の保障ではな  
くて、この大学を出た人は専門性の度合いが  
八割くらいで、あと二割はいわゆる教養の能  
力をつけて出したとか、あちらの大学を出た  
人は専門と教養は五分五分で出したとか、本  
当の学歴がわかる大学であってほしい。今の  
ような「ところてん式」ではなくて、ダメな人  
は落として、大学の方針にあった人だけを卒  
業させる。それを企業が採用することになれ  
ば、入学歴ではなく、まさに卒業学歴が重視  
されるようになる。  
いま社会は大きく変わりつつある。成熟し  
た社会では落ちこぼれをなくして、皆の能力  
を平均的に上げるのではなく、ブレイクス  
ルーの力を育てほしい。また、「大学はどうあ  
るべきか」ではなくて、「この大学はどうある  
べきか」という議論をすべきだ。シラバスを  
学校を選ぶときに公開するようにすれば、教  
員と学生の思い違いも起こらないだろう。最  
後に、いま大事なことは、選択する主体性と  
能力のある個が確立しているのだから、この  
個性を生かすように大学を作り変えてほしい。

◇

諸氏の意見開陳、その相互間のやりとりの  
あと、フロアから天城勲氏、木田宏氏、佐野博  
敏氏と次々に質問がとび出し、この討議の場  
は活気にあふれた。小憩後の懇親パーティー  
は、一転して和気藹々、昔を、今を、そして将  
来を語り合いつつ、時のたつのも忘れる「集  
い」となった。

第1回共同セミナー委員会

'95年6月23日/アルカディア市ヶ谷

【出席者】野崎昭弘、桜井哲夫、宇波彰、柴坂寿子、伊藤正直、土屋俊、福岡安則

【ハウス側】岡宏子館長、企画室スタッフ3名

●主な議事

(一)第164回大学共同セミナー「ペイトン再発見」、第165回大学共同セミナー「フィールドワークの実際」、第166回大学共同セミナー「生命を考える」の実施報告、(2)平成6年度プログラム(の総括、(3)第14回大学院共同セミナー「ヨーロッパのアイデンティティ」統合の現在、その光と影(仮題)、第167回大学共同セミナー「民主化の比較政治学(仮題)」、第168回大学共同セミナー「電子メディアと21世紀のライフスタイル(仮題)」の準備状況、(4)平成7年度教育プログラムの計画、(5)平成8年度教育プログラムの企画など。

平成7年度共同セミナー委員(○印は新任)

〈委員長〉

野崎昭弘 大妻女子大学教授(情報科学)

〈副委員長〉

桜井哲夫 東京経済大学教授(理論社会学)

宇波彰 明治学院大学教授(哲学)

〈委員〉

柴坂寿子 お茶の水女子大学講師(人間行動学)

島菌進 東京大学教授(宗教学)

伊東孝之 早稲田大学教授(比較政治学)

江原由美子

東京都立大学助教授(社会学・女性論)

草野厚

慶応義塾大学教授(政治学・国際関係学論)

佐伯 聡 東京大学教授(教育方法学)

松井孝典 東京大学助教授(比較惑星学)

伊藤正直 東京大学教授(日本経済・金融論)

小森陽一 東京大学助教授(日本近代文学)

土屋俊 千葉大学教授(哲学)

福岡安則 埼玉大学教授(社会学)

○長谷川眞理子 専修大学助教授(行動生態学)

千人会

'95年6月〜8月

◆ご入会ありがとうございました

◇木畑洋一殿 東京大学教授/B

◇並河一道殿 東京学芸大学教授/A

▼会員数11、四四一名

◆会費ありがとうございました

徳永勇雄、荒井基、朝野洋一、長田洋子、藤井耕一、栗原尚子、林邦夫、野沢浩、近藤正夫、竹内喜代司、村瀬曼、古畑和孝、島田淳子、小島守生、佐藤進、安宅光雄、北村嘉行、長谷川幸男、阿久津喜弘、江沢洋、藤木宏幸、佐久間まゆみ、二谷貞夫、嶺哲之助、三浦徳弘、伊藤喜栄、相澤忠一、荒井基、秀村欣二、中村幸安、原田富士雄、柳下勇、吉田幸弘、北野美枝子、鐘ヶ江信光、西川治、川田侃、名東孝二、大内力、中野スミ子、福田延衛、田中裕、白井久和、中山昌、柴田勇造、長清子、見田宗介、今堀和友、石井脩二、高橋勇悦、栗林恒雄、犬塚博、福山直美、山本和子、奥村敏恵、笹森健、松岡秀俊、井早康正、児玉昭太郎、片岡清子、金子晃、石井明、石川信男、柏原啓一、光延明洋、杉浦銀治、鈴木達雄、水野弘文、広内哲夫、中村哲哉、土田美芳、布施清雄、松平文朗、阿部斉、慶谷伸代、伏見康治、小倉充夫、綿引二郎、和田英一、柴田政利、中村登志哉、藤原鏡男、吉松藤子、永井裕、平野文彦、黒田道雄、石井進、鳥海俊宏、山代昌希、渡辺芳彦、藤平重雄、武者利光、猪瀬尚志、岡宏子、川崎節生、中村浩三、森川八洲男、厚東偉介、辻達也、三橋文雄、高橋公雄、讃岐和家、三和

開館30周年記念出版 一九九五年七月八日発行

大学セミナー・ハウス編

続・大学は変わる

―大学教員懇談会一〇年の軌跡―

●四六判 二七八頁・定価二、〇〇〇円(国際書院刊行)

【執筆者】示村悦二郎・中西又三・宮腰賢・安岡高志・吉川政夫・高倉翔・清水一彦・平野健一郎(執筆順)

この一〇年の社会情勢の変化は大学のゆくえにも大きな影響を与えており、九一年の大学設置基準の改正は、大学改革に拍車をかけた。一般教育をはじめとした、大学教育の諸問題、設置基準の学生像、教員自身のあり方を徹底的に論議し、制度、カリキュラム、学生・教員増の現代史的変革を展望している。

《目次》

I部 改革の前後

一章 目前に迫る一八歳人口の急増急減

二章 湧き起る大学改革への論議

三章 臨時教育審議会から大学審議会へ

II部 改革への苦悩

四章 大学教育の諸問題：一般教育の問題/外国語教育の問題/保健体育教育の問題/専門教育の問題/苦悩のみならず

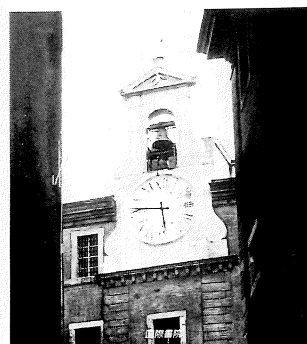
五章 学生像：教員の目に映る学生像/高校生の進学理由/学生の大学観/学生の見た教員像/学生による授業評価

六章 大学設置基準の改正と大学の動き：大学設置基準の改正とねらい/大学改革の課題

治、林ひろみ、鹿島健次、柏木恵子、窪田富男、松島恵、築田長世、佐藤豪、長浜洋一、弦田実、小川信子、仙田哲、橋本智、中山光雄、木村敏美、太田善廣、中島文夫、三宅彰、角瀬保雄、木村敦、金谷憲、古関彰一、田島恵児、

続 大学は変わる

大学教員懇談会10年の軌跡  
大学セミナー・ハウス編



と方向/先進的大学の改革事例/求められるU I  
七章 教員自身のあり方をめぐる論議：求められる意識改革/FDの定義/FDはなぜ必要か/大学教員研修/私の授業―授業法の工夫について/教員評価―自己点検・自己評価として

III部 改革の萌芽

八章 制度の改革：改革の背景/大学の自己点検・評価/大学の多様化と個性化/教養部改組/制度(運営)の柔軟化/大学院の改革  
九章 カリキュラムの改革：大学設置基準の大綱化とカリキュラム改革/一般教育とカリキュラム改革/打ち出される独自の教育体系/授業体制・授業改革  
一〇章 求められる学生像：社会が求める学生/大学・大学教員が求める学生  
一一章 努力し、苦闘する教員：学生との苦闘/あるべき大学を求めて/社会に向けて

▼問い合わせ ☎〇四二六(七六)八五三三II大学セミナー・ハウス企画室まで

米村貞蔵、福井正紀、川原啓美、五十嵐武士、小池滋、山西貞、橋本研一、原誠、志賀英、芥川龍男、吉田美穂子、松尾秀雄、浅井邦二、大野澄子、桐澤潔、稲田拓、西村敏男、田村恭、古本捷治、山口重克、伊東一江(敬称略)

# おたより

●オーストラリア、ニュージーランドに出張しており送金がおくれました。悲しからず。  
 (明治大学名誉教授・徳永勇雄)

●一年毎に老の深まりを実感しますが細々ながら研究を続けています。  
 (学習院大学名誉教授・近藤正夫)

●古希をお祝い下さり誠にありがとうございます。  
 (竹内運輸工業・竹内喜代司)

●私も六十四歳を迎えることができました。  
 (帝京大学教授・古畑和孝)

●大学内、学会その他でさまざまな問題を抱えて、へとへと毎日でありますが、ともかく元気で六十二歳となりましたことを喜びつつ。  
 (お茶の水女子大学教授・島田淳子)

●職を退き毎日読書と俳句三昧の日々を過ごしています。創立三〇周年を心よりお慶び申し上げます。  
 (嶺哲之助)

●私も七十歳となり、学会など大幅に整理、脱会など致しました。千人会にもあまりお役に立たず恐縮に存じます。セミナー・ハウスのご発展を祈念致します。  
 (川田侃)

●戦後五〇年、日本の進路危うしと思ひ、主催者教育に力が入る今日この頃です。  
 (上越教育大学教授・二谷貞夫)

●千人会のお便りとともにセミナー・ハウス「開館30周年の記念の集い」をも拝受致しました。回想と前進の集いであるよう祈りつつ、出席させていただきます。  
 (東京大学名誉教授・秀村欣二)

●お陰様で、若い学生諸君に囲まれながら六十四歳の「春」を迎えることができました。  
 (中央大学教授・原田富士雄)

●開館三〇周年おめでとうございます。あれこれと思ひ出の多いところです。  
 (青少年育成国民会議評議員・中野スミ子)

●この六月四日満八十五歳になります。お陰で元気にしています。セミナー・ハウス誌靜かに読んでいます。  
 (福田延衛)

●いつの間にか三〇年たちました。おめでとうございます。武蔵工大の学生さんと交流し、楽しい思い出を作ることが出来、当時の女子学生達も喜んでいました。  
 (元目白学園女子短期大学教授・中山昌)

●小生、本日老人医療証を拝受し、満六十五歳を迎えたことを痛感しましたが、三歳の初孫と元気に過ごしています。  
 (東京医科歯科大学医科同窓会サービスセンター・栗林恒雄)

●千人会がセミナー・ハウスのために何かできればと思っています。  
 (井早康正)

●昨年十一月より湘南工科大学教授として勤務しています。富士を負い江ノ島を抱く五月晴れ。  
 (尼玉昭太郎)

●七月末よりウィーン支局へ赴任することになりました。中東欧を思いきり取材し、紙面でご報告したいと考えています。  
 (共同通信社・中村登志哉)

●すっかり遅れてしまい申し訳ありません。九月から一年間の予定でロンドン、ウエストミンスター大学へ出かけます。  
 (横浜商科大学教授・平野文彦)

●少しずつ少しずつ前進しています。即席効果を望む官僚主義との闘いかもしれません。  
 (防衛大学校助教授・渡辺芳彦)

●海外出張にとりまされ、すっかり忘れていました。また、伺わせて頂きます。  
 (国際交通安全学会常務理事・木村教)

●緑色濃いセミナー・ハウスでの三〇周年記念のセミナーに出席させていただきます。心洗われる思いをしました。大正リベラリズムの残映の中に幼少の時代を過ごした者にとって、今の人間関係は窮屈です。豊かな人間形成の場がこのキャンパスの中から生まれてくることを祈ります。  
 (元跡見学園女子大学教授・橋本研一)

●元気に過ごしています。一年半後の定年も気にせずに仕事をしています。  
 (法政大学教授・芥川龍男)

●この夏は暑い中、専ら書きものに終始しました。  
 (東京外国語大学教授・小沢重男)

# 寄付

95年6月〜8月

〈一般寄付金〉

一三、〇〇〇円 東京理科大学大澤セミ殿  
 (現物)  
 将棋の駒一式 中央大学通信教育部馬場亮殿  
 額入絵画二点 住友銀行北野支店殿

〈開館30周年記念祝金〉

一〇、〇〇〇円 東京電力東電学園大学部殿  
 一〇、〇〇〇円 防衛大学校教授鶴野省三殿  
 一〇、〇〇〇円 谷澤虎吉殿  
 五、〇〇〇円 大学セミナー・ハウス食堂  
 一〇、〇〇〇円 交友館酢屋善元殿  
 一〇、〇〇〇円 '95年度国際基督教大学心理学サマーセミナー殿

五、〇〇〇円 日本女子大学殿  
 一〇、〇〇〇円 専修大学学長望月清司殿  
 五、〇〇〇円 順天堂大学殿  
 二〇、〇〇〇円 中央大学通信教育部殿  
 一〇、〇〇〇円 東京純心女子短期大学殿  
 三〇、〇〇〇円 C I C カナダ国際大学殿  
 一〇、〇〇〇円 学園都市推進会議会長田辺隆 郎殿

二〇、〇〇〇円 早稲田奉仕園殿  
 一〇、〇〇〇円 関西地区大学セミナーハウス常務理事三野智章殿  
 一〇、〇〇〇円 社会福祉法人王樹会多摩シルバーハウス理事長小泉資朗殿  
 一〇、〇〇〇円 中央公論事業出版殿

一〇、〇〇〇円 日野社会教育センター殿  
 五、〇〇〇円 八王子市長波多野重雄殿  
 五、〇〇〇円 八王子市議会議員伊藤寿昭殿  
 五、〇〇〇円 八王子市議会議員萩生田富司殿

一〇、〇〇〇円 おさひめ幼稚園殿  
 一〇、〇〇〇円 野猿特自治会殿  
 一〇、〇〇〇円 石井竹松殿  
 一〇、〇〇〇円 石井栄治殿  
 一〇、〇〇〇円 伊藤房夫殿  
 一〇、〇〇〇円 伊藤建築設計事務所伊藤繁殿  
 一〇、〇〇〇円 茂木光子殿  
 一〇、〇〇〇円 大妻女子大学教授佐野博敏殿  
 一〇、〇〇〇円 聖心女子大学名誉教授野澤晨殿

五、〇〇〇円 石村直子殿、佐藤玉枝殿、新城信枝殿、保坂純子殿、森玲子殿  
 一〇、〇〇〇円 村上光雄殿  
 一〇、〇〇〇円 日本工業大学松澤正夫殿  
 一〇、〇〇〇円 小田原女子短期大学長大山乃富子殿  
 一〇、〇〇〇円 ユネスコ・アジア文化センター飯田忠殿

一〇、〇〇〇円 東京女子短期大学学長西田亀久夫殿  
 三、〇〇〇円 坂本光子殿  
 五、〇〇〇円 田島澄江殿  
 五、〇〇〇円 伊藤清子殿  
 五、〇〇〇円 河田喬夫殿  
 五、〇〇〇円 丸山友一殿  
 五、〇〇〇円 浅野正行殿  
 三〇、〇〇〇円 昭和中衛設備井上治雄殿  
 三〇、〇〇〇円 オリエントサービス殿  
 三〇、〇〇〇円 アイワテクニカルサービス殿  
 二〇、〇〇〇円 清水建設八王子工務事務所殿  
 三一、四〇〇円 東京大学教授平野健一郎殿

## ●開館30周年記念特集

### 「私と大学セミナー・ハウス」

7月8日、ハウスは開館30周年を祝い、「記念の集い」を催した。この30年間にこの丘で合宿研修をされた方々は、グループ数で二万九、二五六、宿泊延人数にして一四二万五、五三〇人に達した。そのおひとりおひとりとも刻んできた「30年」の年輪である。

30年が経過して——開館当初からハウスの諸活動に携わり、かつ学生を連れて何度も合宿をされた先生方の中には、定年を前に「これが最終合宿です」と言われる方々が年々多くなった。一方、当時学生だった方で、いまは教師として自分の学生の指導にハウスを利用される「第二世代教師」も増えてきている。このことは、ハウスを築いてこられた先人の志が世代から世代へと引き継がれていることの証である、と言えるだろう。

本号の「業務通信」では、開館30周年を記念して、右記二つの世代の先生お三方に、それぞれのようにハウスと関わりを持ってこられたか、を綴っていた。

#### ●「最終合宿」に想う（ともに下掲）

（その1）大きな画用紙の名札を紐で首から下げた男女学生のグループを食堂などで見かけることがある。「エンカウンター・グループ」である。「心とこころのふれ合い」と「新たな自他の発見」を目指すこの試みは人間関係ワークシヨップとも呼ばれる。近年、同様のプログラムがますます盛んであるが、「ここにはコミュニティの生活があるから、エンカウンター・グループにうってつけの場所だ」と、ハウスで初めてその合宿をされたのは筑波大学の國分康孝教授で、今から約20年も前のことである。以後、そのプログラムの性格

故に、おのずから個別大学の垣根を越えた「インターカレッジ人間関係ワークシヨップ」へ、さらに世代を超えたOB・OGらが集う「同リユニオン」へと発展し、後年、関連の合宿は年平均二〜三回（最多で五回）におよんでいる。本年7月末の筑波大学大学院の研究會が同大教授としての「最終合宿」となったが、國分先生が「心の問題」に取り組み続けられる限り、これからも「エンカウンター」でこの丘に戻ってこられるはずである。

（その2）キャンプファイヤーの輪に学生たちとともに座り、燃え盛る大きな炎に静かに見入る先生のシルエツトが印象深い。今年5月はじめの夕暮れのことである。教師としての生活が間もなく終わり、ハウスでの合宿もこれが最後——学習院大学の齊藤孝教授は、その時、そのような感慨に浸っておられたのだろうか。82年以來毎年、青葉若葉のゴールデンウィークに恒例の二泊三日の合宿演習を続けられた。計13回、後年はお体の不自由を押しての実施であった。記念樹のハナミズキが花ひらくその季節に、「斉藤ゼミ」OB・OGらと、ぜひこの丘に訪れていただきたい。

#### ●当時「学生」「いま「教師」として

この夏の「開館30周年記念の集い」の日は雨だった。「30年前の開館の日もこのような雨でした。道はどろんこでした。感慨深げにそう語っていたのは東京学芸大学の並河一道教授。当時、東京教育大学の2年生だった。その前年、開館前にハウスが企画した「新入生を迎える講演會」に出向いたことが縁で、開館記念の第一回大学共同セミナーに参加した。後に東京大学物性研（この間ハウスで研究会二回）を経て87年に東京学芸大学へ。以後、物理学の教師として新入生合宿研修やゼミでハウスの利用を続けてこられ、また、この秋は大学教員懇談会にも参加された。開館記念日のと、「ハウス第二世代教師」としてのメッセージ（15頁）をお寄せいただいた。

## 今年「最終合宿」を迎えて

### 1) グループエンカウンター誕生の地

筑波大学教授 國分康孝

私にとってハウスは研究テーマのひとつ「構成的グループエンカウンター」誕生の地である。その中間報告は『エンカウンター』『構成的グループエンカウンター』（いずれも誠信書房）の二著に記した。卒論や修論のテーマに私の提唱するこの分野をとりあげる学生が毎年四、五人はいるようになった。昭和五十年前半に参加した学生は大学の教員になって構成的グループの研究をすすめている。小中高校の教員になったものは構成法を用いて中退者の減少、進路意識の向上、異文化への違和感の緩和、仲間の輪の拡大、自己肯定感の増加などの実践報告をしている。

私はそれゆえにハウスで二十回の夏を学生と共有した甲斐があった、日本のカウンセリング界に構成法を提唱することができた、という男児の本懐にも似た心情でリタイアできる幸福に恵まれている。

もしこれからの夏も胸に名札をぶら下げたグループを見かけたら、「國分の構成的グループエンカウンター」の健在をよるこんで頂きたいと願うものである。



最終日、参加学生から花束を受ける國分康孝先生と合宿でも常に先生のよきパートナーをつとめられた久子夫人（'95.8.24／本館ロビー）

### 2) ゴールデンウィークの合宿演習

学習院大学教授 齊藤孝

五月の大学セミナーハウスのキャンパスは美しい。青空の下、新緑の間にツツジやハナミズキの紅やピンクと白がひとときわ目立っている。その五月、さわやかな、そして落ち着いた環境の中で、毎年恒例として、私は二泊三日の合宿演習を行っていた。今年で十三回目になった（ただし、一九八二年と八三年は、それぞれ九月）。

開館のころ、私は大学関係のいくつかの会合や飯田宗一郎専務理事のお招きによる社会人の集まりなどがある。ゆつたりとしたキャンパスは、都会の喧噪と大学キャンパスの狭隘さにうんざりしていた私には嬉しかった。残念なのは、キャンパスの上空が横田基地への進入路に当たっているために、米軍機の爆音が絶えなかったことである。ヴェトナム戦争の激しかった時代である。

セミナーハウスは今年で開館から三十年を迎えた。軍用機の騒音は、まだ十分ではないが、往時よりは静まった。私の教師生活は間もなく閉じる。五月の合宿演習は今年で終わった。これからは、記念として植えたハナミズキを見にくるつもりである。

最終合宿でゼミ生たちに囲まれる齊藤孝先生（'95.5.4／交友館前庭）



# ハウス第二世代教師として

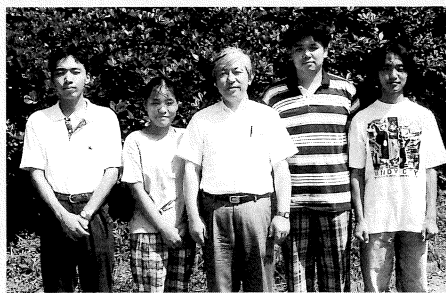
## 開館記念セミナーからの 30年

東京学芸大学教授 並河一道

三十年前の四月、それなりの期待を持って大学に入学した私は、講義には真面目に出席していたが、高校時代と余り変わらない自分の勉強姿勢に、これでいいのだろうかという不安を持ちながら学問への道を模索していた。

その年の五月、「新入生を迎える講演会」が大学セミナー・ハウスによって本郷の安田講堂で行なわれ、朝永振一郎先生と大塚久雄先生による講演があった。学問の道への手がかりが得られるのではないかとという期待を持って、この講演会へ出かけたことを新緑の輝きとともに昨日のように覚えている。

このような背景があったので、開館記念大  
学共同セミナーの案内があったとき、自然に  
これに参加した。当時の私の専攻に直接役立  
つような知識が得られたわけではないが、當  
時の先生方の学問に対する真摯な姿勢と学生



30年前の体験を、いま学生たちに「人生と科  
学」と学問について」をテーマに研究室の合宿を  
された並河一道先生 ('95.8.25 / 本館前広場)

の教育に対する情熱に強い感銘を受けた。ま  
た、他大学の学生と自分の専攻と関係ない分  
野で夜更けまで議論したのは、ぬかるみの道  
とともに忘れられない思い出である。これら  
の体験は、その後の私の研究生活の根底で大  
きな存在となり、今日大学の教官をやってい  
る縁ともなっている。

当時と比べて大学をとりまく状況が大いに  
変わったように言われており、実際大学では  
様々な改革が実行されている。これらの改革  
は経済原則の認識にかかわる側面が特に強調  
されているか見える。その第一は、学生に  
対するサービスの問題で、FDなどもこの文  
脈で語られることが多い。その第二は、研究  
業績に対する投資効率の問題で、大学の自己  
評価にはこの視点が強い。

大学はこれらの問題を避けて通ることはで  
きないと私は思っているが、大学には経済原  
則では押し切れない歴史的・社会的な役割の  
あることを忘れてはならない。それは、大学

が学問の文化としての側面を担っていること  
である。技術が知識とともに文明の構成要素  
であるのに対し、学問は芸術とともに文化の  
構成要素である。学問に投資効率の概念がな  
まないと同様に、芸術に投資効率の概念がな  
まないと同様である。文化としての学問を  
担っていく組織は大学以外にあり得ないし、  
これこそ大学の重要な存在基盤であり、核で  
ある。

それでは、大学がこれに対し十分な役割を  
果たしているかというと、実は、現在の組織  
は余り有効に機能していない。その詳細な原  
因の分析と具体的な改革の方法は別の機会に  
ゆずるとし、大学セミナー・ハウスの叢生期  
の理念と機能はこれらの大学の欠陥を埋める  
ものであり、新しい大学の改革の方向を示す  
ものと言える。現在、大学セミナー・ハウスの  
存在の意義は、大学の教育の核となるべきも  
のを次世代に伝えることのできる場（ミクロ  
コスモス）である点にある。

# 利用状況

## 6月(61グループ、延三二四〇人)

- 東京都立大学建築学科新入生オリエンテーション
- 東京学芸大学英語科新入生オリエンテーション
- 東京学芸大学障害児教育学科3年次生進路選択合宿
- 横浜国立大学助教
- 東京都立大学助教
- 東京都立大学教育学生会
- 芝浦工業大学助教
- 青山学院大学アンビシャス国際問題研究愛好会
- 駒沢大学助教

95年6月8日  
\* 同月2回利用  
\* 同月3回利用  
日帰りを除く

- 法政大学教授 水野 節夫
- 東洋英和女学院大学教授 朝倉 孝吉
- 杏林大学新入職員フォローアップ研修 師岡 孝次
- 共立女子大学総合講座社会と女性 栗原 彬
- 中央大学企業研究所 島田 征夫
- 日本大学映画研究会 石井 秀夫
- 東海大学助教 早稲田大学助教
- 立教大学助教 早稲田大学助教
- 早稲田大学助教 早稲田大学助教
- 東京都立大学社会学部福祉学合宿 早稲田大学似島ワークキャンプ
- 中央大学助教 サドリア・モジユタバ

- 東京理科大学狩野・高橋ゼミ 陣内 靖彦
- 東京学芸大学教授 三和一博
- 中央大学助教 谷敷 正光
- 駒沢大学助教 砂田 一郎
- 学習院大学助教 砂田 一郎
- 中央大学第1経済学部ゼミナール連合会 青野 寿彦
- 中央大学助教 チュービンゲン大学サッカー部
- 武蔵野外語専門学校新入生オリエンテーション 小川 家資
- 帝京山梨看護専門学校 阿佐ヶ谷美術専門学校
- 西東京科学大学助教 小川 家資
- 阿佐ヶ谷美術専門学校 目黒星美学園小学校教員研修
- 日本女子大学附属高等学校 関東心理リハビリテーション連絡協議会
- 郡内研究会 分析化学若手の会
- 第14回大学院共同セミナー
- 第23回十大学合同セミナー

## 7月(71グループ、延三二二七人)

- 学習院大学助教
- 日本大学助教
- 電気通信大学助教
- 立教大学助教
- 東京理科大学助教
- 東京農工大学生命工学科新入生オリエンテーション

- 吉本 昌司
- 菅 忠義
- 徳江 俊秀
- 多田 好克
- 小西 正捷
- 沖塩莊一郎
- 井村 君江
- 国際基督教大学心理学サマーセミナー
- 成蹊大学北京大学短期留学研修会
- 東京大学助教 山本 敏右
- 一橋大学助教 平野 武利
- 桜美林大学助教 岩井 清治
- 東京農工大学環境資源科学科新入生オリエンテーション
- 恵泉女子短期大学英文文学科総合科目「国際」
- 東京理科大学助教 狩野 紀昭
- 東京電機大学企画・広報部 藤原 帰一
- 東京大学助教 藤原 帰一
- 法政大学哲学会 稲上 毅
- 中央大学助教\* 西海 真樹
- 中央大学エクス・マルセイユ第三大 学短期留学研修会
- 千葉大学助教 菅原 憲二
- 東京外国語大学講師 藤原 帰一
- 慶応義塾大学助教 香川 敏幸

●第169回大学共同セミナー●

文学の方法—漱石を仲立ちとして—

1996年3月8日～10日(金～日、2泊3日)

定員：70名 申込締切：2月20日(火)

◆ゲスト講演

『續明暗』の前と後—私にとっての「漱石」なるものの変容— 作家 水村美苗氏

◆セクション演習

A. 構造・語り手・脱構築—『こころ』を例にして—

成城大学文芸学部助教授 石原千秋氏

B. 活字と肉筆のあいだ—『心』(『こころ』)と『明暗』を中心に—

学習院大学文学部教授 十川信介氏

C. 夏目漱石の作品内における、徳川文芸的要素と西洋文学的要素の対立・葛藤

大阪大学言語文化学部講師 小谷野敦氏

D. 記号論・都市論・メディア論、そしてカルチュラル・スタディーズの行方

東京大学教養学部助教授 小森陽一氏

(運営委員) 小森陽一氏

◆問い合わせ先

大学セミナー・ハウス企画室  
TEL 0426-76-8532 FAX 0426-76-0266

- 成蹊大学教授\* 宇野 重昭
慶応義塾大学助教授 中込 昌孝
東京工業大学助教授 徳田 雄洋
高千穂商科大学助教授 岩田 伸人
東京学芸大学講師 投野由紀夫
東京大学教授 見田 宗介
筑波大学教授 國分 康孝
中央大学通信教育部 西平 直喜
東京YWCA専門学校 創価大学教授 布川 孝司
東京会計法律学園職員研修 大竹 孝司
独協大学教授 山梨学院大学助教授 布川 玲子
創価大学仏語研究会 念の集い
郡内研究会 7大学大学院合同セミナー
第1回大学院生心理臨床研究会
フランス語応用普及協会
日本ワイルド協会
セミナー・ハウス同窓会
共感研究会
吉阪隆正シンポジウム
東京都中途失職難聴者協会
アジア経済研究会
黒川文書研究会

- 東京大学教授 似田貝香門
東京都立大学山川・秋山ゼミ・東京大学家田ゼミ
学習院大学教授 高橋 利宏
千葉大学助教授 雨宮 昭彦
法政大学助教授 齊藤 利通
早稲田大学大槻ゼミ 日本大学教授 佐藤 誠
青山学院大学保育史研究会 橋本 毅彦
東京大学助教授 黒田 淑子
お茶の水女子大学教授 東京学芸大学A.I.T.C 明治大学教授 原 道生
早稲田大学教授 大島 英樹
アイセック慶応義塾大学委員会 中央大学通信教育部 明星大学通信教育部
東京理科大学元教授 大澤綱一郎
東京学芸大学教授 太田 幸男
明治学院大学教授 加藤 雄司
早稲田大学教授 中野 忠
横浜国立大学仁木・垣内研究室 寺中 良二
東京学芸大学教授 並河 一道
東京学芸大学講師 投野由紀夫
慶応義塾大学英語会 渡辺 昭
早稲田大学理工学部英語会 森川八洲男
明治大学教授 戸沼 幸市
早稲田大学講師 箕口 雅博
慶応義塾大学人間関係ワークショップ 立石 廣男
埼玉大学教授 福岡 安則
東京経済大学教授 島田 和夫
日本大学教授 立石 廣男
横浜国立大学ESS 中央大学生協同組合
神奈川県立津久井高等学校 神奈川県立津久井高等学校演劇部
神奈川県立津久井高等学校 駒宮 史博
新潟大学助教授 駒宮 史博
東京都立玉川高等学校演劇部 十文字学園女子短期大学演劇部
佼成学園高等学校数学研究同好会
マラーヤ大学日本研修ツアー 植村 利男

館長室から
少し遅くなりましたが、30周年記念の集いの模様、お出し頂けなかった方々にもその雰囲気をお分けしたく、特集いたしました。生憎の雨で出足の鈍りを心配しましたが、「出席、但し雨天欠席」と御返事があった長老の方も御来館下さるなど、二百余名の賑わい、ハウスにお寄せ下さる御厚情を改めて感じ入りました。
ところで、「駕籠に乗る人担ぐ人、そのまた草鞋を作る人」といいますが、この和やかな中にも意義深い集いの裏方部隊の様子もお耳に入れたくなりました。全体の企画構成を「ア〜でもない、コウでもない」とこねくり廻す私に、気持ちよく共に作業を進めた企画室、総務、業務の職員。更には、「あそこはあまり早く刈ると当日のびるから、三日前にきれいにするよ」と作業の日取りを考えてくれる環境整備の係、長い梯子をかけて講堂の上窓まで磨く清掃部隊、当日の短時間の二回の模様替えをどうするかの手筈を整える設営の面々。懇親会の御馳走は食堂の手作り。デザートのさくらんぼは山形からの直送のほうが……などと心を込めた用意に、「この種の会にないおもしろさ、どこからとられましたか?」の声がきかれました。この心を併せての努力を目のあたりにして、これで新生セミナー・ハウスの準備が整ったの思いしきりです。(岡)

表紙の写真は開館30周年記念シンポジウム「教養と専門教育から見た現在の大学改革」での討論風景